

歩兵第六十一聯隊跡

～和歌山の郷土部隊～

(和歌山市)



第61聯隊守衛門跡

歩兵第61聯隊は日露戦争末期の明治38年(1905)8月、大阪に創設されたが、5年後の明治43年(1910)3月この地に兵営が築かれ、爾来和歌山県の郷土部隊として終戦の昭和20年(1945)まで35年の歴史を刻んだ。

記録に依れば、毎年催される創立記念日にあたる「軍旗祭り」では当地が市民に開放され、多くの催し物で大変賑わったようである。現在の小松原通り5丁目からこの営門跡まで幅広の道路が走っており、往時の面影を残している。

和歌山城内に護国神社があるが、ここにコンクリートでできた円卓がある。聯隊跡から移設されたものであるが、当時と同じように藤棚も設えられている。県内各地から徴兵された若い兵士達がこの円卓を囲み、お国自慢やら家族の事など和歌山弁で談笑している姿が目に見えよう。

(取材 萬羽)



藤棚の下の円卓(護国神社境内)



鎮魂碑(護国神社境内)



ベンゼン精留塔(本州化学工業)～和歌山の近代化遺産～(和歌山市)

紀州ネルという言葉で知られているように、和歌山は昔から織物など繊維産業が盛んな土地です。そして繊維産業にはいろいろな色に染める「染料」が欠かせない。当時合成染料は全量ドイツからの輸入に頼っていたが、大正3年(1914)第一次世界大戦のあおりを受けて輸入がストップ、国内の染色産業は大混乱に陥っていた。そこで家業が染色業であり、進取の気性に富む由良浅次郎は、国内初となる合成染料の中間原料であるアニリンの製造を決意。本州化学の前身となる由良精工を設立しアニリンの原料である高品質のベンゼンを製造すべく精製に着手した。自ら設計した精留塔建設のため市内にある鋳物メーカー等に何度も足を運び、数ヶ月で完成させたそうである。この石油化学の基礎原料であるベンゼンの精製装置、いわば日本の有機合成化学産業がここからスタートしたと言えるものである。

この記念すべきモニュメントは平成21年(2009)近代化産業遺産に指定され、本州化学工業の工場敷地内に保存されている。見学もできるので一度お訪ねください。

(取材 萬羽)



本州化学正門



ベンゼン精留装置